

SHOKOKAI

3

March 2026

地域を結ぶ総合情報誌 月刊 商工会

特集 女性が彩る 日本酒の未来

地域を訪ねて

海と手袋と和三盆
香川県東かがわ市

わたしのふるさと
タレント

前川清さん

常磐線の電車がすぐ脇を通る「とみおかワイナリー」



ショップの2階にあるレストランにて、遠藤さんとスタッフ

ぶどう畑を新たな景色に。 ワイン文化で地域と人をつなぐ

とみおかワイナリー(株式会社ふたばラレス)／富岡町商工会(福島県富岡町)

建設コンサルティング会社を経営する傍ら、ワイン事業を立ち上げた同社。海外でワイン畑に人が集う姿と富岡の未来を重ね合わせ、挑戦を続けている。

海外での経験で気づいた ワイン文化がもつ力

2025年5月、JR常磐線・富岡駅から歩いて10分余りのところに「とみおかワイナリー」がグランドオープンした。1階は醸造所とショップ、2階にはレストランと広いテラスを備え、隣接する約6・5ヘクタールのブドウ畑と、その向こうに広がる太平洋を一望できる。建物周辺には、誰でも気軽に集えるよう、ガーデンキッチンを備えた多目的広場も整備した。「とみおかワイナリー」(株式会社ふたばラレス)の代表取締役を務めるのは、同じ富岡町に本社を構える建設コンサルタント会社(株式会社ふたば)の代表でもある遠

藤秀文(ひらふみ)さん。建設コンサルタント会社の創業者である父の勝也さんは、東日本大震災の前後16年間、富岡町長を務めた人物だ。「私は富岡町で生まれ育ち、大学進学で町を離れたけれど、就職活動の際、『役に立つ人間になって35歳で富岡に戻ろう』と決め、それまでにさまざまな海外を見て勉強をしようと思いい、海外事業を多く手がける建設コンサルタント会社に就職しました」

社員として30カ国近くで開発援助などの仕事に従事。多様な文化に触れるなかで、ワインを通してつながる、ある地域の姿に大きな魅力を感じた。30歳を過ぎて「富岡町に何が必要か」を具体的に考えるようになったとき、「ワイン

文化を根づかせたい」と思うようになったという。

「富岡町は、海・山・川など豊かな資源がバランスよくある、魅力あるまちです。ただ、すべてが点で存在してつなげていません。ワイン文化が根づけば生産者とのつながりができるし、地元の食材を生かすなど新たな産業にもなる。ワインにはそうしたつながりを生み出す力があると思うんです」

そして2008年、35歳で富岡町に戻ってきた遠藤さんは、その思いを実現するべく、週末になると自転車で町内を走り、ブドウ畑に適した場所を探した。

「そのとき一番いいなと思ったのが富岡駅前です。駅前にブドウ畑が広がっている夢を何度も見ました。ただ、当時は多くの人が住んでいましたから、買い取ってブドウ畑をつくるなんて現実離れしたことだと思っていました」

朽ちていくまちを見て 思い浮かんだブドウ畑

ところが、3年後の2011年に東日本大震災が発生。富岡町は原発事故で全域が避難区域となり、



左/富岡駅からワイナリーに向かって線路を渡ると、ワイナリーの顔であるとみおかワイナリーのゲートが見える。屋根付きの施設で、屋根の上からは海など周辺を一望できる 右/現在販売しているワインは7種類前後(生産が追い付かないためレストランでの提供分を除いて販売停止中のものもある)





現在、とみおかワイナリーのワインを買い求めるのは、このショップだけ。赤ワインを仕込んだ後に残った皮と種を贅沢に使用したクラフトビールも楽しめる

とみおかワイナリー

特急が止まる 駅前のワイナリー

「ずっと夢中で走り続けてきたの

「ワイナリーの経営には長期的な関わりに加え、大きなリスクがないと思います。これまで関わってくれた一般社団法人の理事と何度も議論した結果、ワイナリーの経営を担うのは私に限られ、代表になりました。妻が取締役として手伝ってくれたことがとてもありがたかったですね。以前より夫婦の信頼関係も強くなりました」

で、「とみおかワイナリー」をオープンして初めて、冷静に圃場の景色を見ることができるようになりました。無人だったときの景色も知っているので、この畑に立つと震災前に見ていた夢のなかにいるような不思議な感覚になって、鳥肌が立つときがあるんですよ」

オーブンから半年以上が過ぎた現在では、遠方からも多くの客が訪れるようになり、少しずつ認知されてきている実感があると遠藤さんはいう。

「マスコミに取り上げられたこともありますが、それよりも口コミで知ったという方が多数です。予想外だったのは、企業研修の申し込みが増えていること。とみおかワイナリーができるまでのプロセスを若い社員に伝えたいという企業が少なくなく、最近は毎週のように企業研修の予定が入っています。また、毎月多くのボランティアが圃場の整備や収穫を手伝いに来てくれています」

当面、ここでつくったワインは直販を重視し、できる限り富岡町に足を運んでもらってワインを楽しんでもらえるようにしたいと遠藤さん。



「とみおかワイナリーの一番の強みは、特急が止まる駅のすぐ近くにあり、歩いて行けるという点です。こんなワイナリーは日本に多くはありません。国内外の多くの人に富岡町を知ってもらい、足を運んでもらいたい。まちと人をつなぐワイン文化を育て、広めていきたいと思っています」



01 / ワインはワイナリー1階にあるショップで購入でき、併設の「希望の蔵」で試飲することも可能 02、03 / ワイナリーには、大津波に耐えて残った蔵を併設。その力を未来につないでほしいという思いから「希望の蔵」と命名した。蔵内ではこれまでの「とみおかワイナリー」の取り組みに関する映像が常時上映されている

とみおかワイナリー (株式会社ふたばラレス)

住所：福島県双葉郡富岡町小浜反町 36-1
事業概要：ワイン製造業、飲食業
従業員数：10人
電話：0240-23-7606
HP：https://tomioka-winery.jp



富岡駅から10分余り、「とみおかワイナリー」と太平洋との間に広がる圃場



左、右/ボランティアの存在もワイナリーの大きな力になっている



「ふたばは震災の1ヵ月後に郡山で事業を再開しましたが、富岡町に來られるようになったのは翌年くらい。そのときもまちは無人で、どんだん朽ちていく故郷の姿を見て、地に足のついた関わりをもちたいと思いました。そのときふと、震災前に描いていたブドウ畑のイメージが浮かんだんです」

そこから一歩ずつ段階を踏んでワイナリー計画を進めた。まず、山梨県のワイナリーや大学に通って学び、2016年に町民有志10人による「富岡ワインぶどう栽培クラブ」を立ち上げた。先祖が残した小高い丘とその周辺の杉林を伐採してブドウを植え、栽培を開始。しかし、週末だけ当番制で栽培している状態ではうまく育たず、2018年に一般社団法人を立ち上げて専任者を雇うことに。本格的な栽培に取り組んだところ、翌年、少量ながらブドウを収穫することができた。そこから畑を少しずつ広げ、より本格的な活動にするため、2023年に株式会社化。株式会社ふたばラレスを設立して準備を進め、2025年に念願のワイナリーが誕生したのである。

まちは人の気配を失っていった。